

フルトヴェングラー・センター® The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1st October 2003

名誉会長 Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

Newsletter No.50 / 会報第 50 号 2017 年 11 月

フルトヴェングラー・センター会員の皆様

今年も早くも 11 月、2 週続きの台風のあとは景色が秋から冬へ急ぎ足で変わりつつあります。時間が経つのも早く、センター版バイロイトの第九がリリースされてからも 10 年が経ちます。レクチャー・コンサートも無事 80 回を数え、会報もおかげさまで持ちまして第 50 号をお送りすることになりました。これもひとえに会員の皆様方のご支援あってのことと、改めて感謝申し上げます。

さて、会報 50 号は以下の内容でお送りします。

目次

1. 新譜 CD 頒布のご案内 「ストックホルムのフルトヴェングラー」 P. 2~3
2. 桧山コレクションについて P. 3
3. 第 80 回、第 81 回レクチャー・コンサートのご報告と記録ビデオ P. 5~6
(DVD、ブルーレイ) 頒布のご案内
4. バイロイト第九 EMI とセンター盤 指揮者 徳岡 直樹 P. 7~9
5. 第 80 回レクチャー・コンサートの感想 理事 中村 匠一 P. 10~15
6. 第 82、83 回レクチャー・コンサートのご案内 P. 16
7. 寄稿「続・フルトヴェングラーの手紙」連載第 16 回 会員 田中 昭 P. 17~18
8. 会員継続手続のご案内 P. 19

新譜 CD 頒布のご案内

フランス・フルトヴェングラー協会 / フルトヴェングラー・センター 共同制作

1950年 スtockホルムのフルトヴェングラー ウィーン・フィル演奏会

ハイドン 交響曲第94番『驚愕』
シベリウス 交響詩《エン・サガ》
R.シュトラウス 交響詩《ドン・ファン》

(CD 1枚 送料込み 2,300円)



フルトヴェングラーが1950年に行なったヨーロッパ・ツアーは北欧から始まりましたが、今回フランス協会との共同制作として、ストックホルムでの演奏会からハイドン、シベリウス、R.シュトラウスの3曲をお送りします。

この約1か月にわたるヨーロッパ・ツアーでは、今では考えられないような重量級のプログラムが組まれ、9月25日の演奏でも、今回収録されたハイドン、シベリウス、シュトラウスにメインプログラムがベートーヴェンの交響曲第5番というものでした。それだけにフルトヴェングラーとウィーン・フィルがこのツアーで並々ならぬ決意をもって臨んだことがわかります。

ハイドンは、翌年に予定されていたEMIのスタジオ録音への準備という意味合いもありますが、EMI録音に比べ、ライブならではの熱気を感じられる演奏になっています。

また、北欧向けに組まれたシベリウスの「エン・サガ」は本録音の他は戦中録音しかなく貴重なものです。ドイツ圏以外の交響曲作曲家として、チャイコフスキーと並んでフルトヴェングラーはシベリウスを高く評価していましたが、この時のツアーの合間に自宅を訪問していることも知られています。

この演奏については2006年にセンターから、ベートーヴェンの5番も含めた2枚組CDとしてリリース済ですが、今回は、フルトヴェングラーがあまり多くを残さなかったプログラムを中心に、最新のリマスタリングでお届けします。もちろん曲間のナレーションも収録されており、アセテート盤による放送録音ながら、大変聴きやすい音の仕上がりになっています。

SWF171

- ① アナウンス
- ② **スウェーデン国歌、オーストリア国歌演奏**
- ③ ハイドンの交響曲紹介アナウンス
- ④ **ハイドン 交響曲第 94 番**
- ⑤ シベリウスの「エン・サガ」紹介アナウンス
- ⑥ **シベリウス 交響詩「エン・サガ」**
- ⑦ R.シュトラウスの「ドン・ファン」紹介アナウンス
- ⑧ **R.シュトラウス 交響詩「ドン・ファン」**
- ⑨ アナウンス

1950 年 9 月 25 日ストックホルムでのライブ録音
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

#####

絵山コレクション

SP レコード の CD 化

前回ご案内しました WFFC1702/3-HYM、ベートーヴェン作品の録音から『**ヴァイオリン協奏曲二長調作品 61**』『**カヴァティーナ**』につきましては、皆さまのお手元にお送りするのが大変遅れましたこと、この場を借りて再度お詫び申し上げます。



Johannes Brahms
 (1833 - 1897)
 Symphonie Nr.1
 Variationen über ein
 Thema von Haydn

Wiener Philharmoniker

Wilhelm Furtwängler

Wien, 17-20 November 1947
 Wien, 30 March & 2 April 1949

Olsen Discography No.127/157
 René Trémone Discography No.151/184

絵山コレクション
 FACULTY
WFFC1704-HYM
 The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

今回と次回は、既発のブラームスの交響曲第 1 番と第 2 番を、制作開始以降今日までに得た知見及び復刻技術(カートリッジ、イコライザーなど)によって新たに収録し直し、さらにつなぎ編集したものをお届けします。

今回は WFFC1704-HYM として、まずブラームス作曲交響曲第 1 番八短調作品 68、ウィーン・フィルとの 1947 年録音と、ハイドンの主題による変奏曲作品 56a を収録します。内容的には既発 WFFC1401-HYM を補完するものとなります。

交響曲第 1 番はフルトヴェングラーにとって

唯一のスタジオ録音ながら、おそらくつなぎ編集がしづらい部分（面の変わり目でテンポが変わるなど）があるとの理由から LP や CD としてはあまりリリースされることがありませんでした。今回はその難題にあえて挑戦し、かなり自然な仕上がりになったと思います。音質も前回リリースしたものよりも格段に向上しており、この演奏の真価を一層堪能していただけることと思います。

これまでリリースしましたものへのご感想や、皆さまのご希望等あればお寄せいただければ幸いです。

WFFC1704-HYM

ブラームス作曲 交響曲第 1 番八短調作品 68

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1947 年 11 月 17~20 日録音 ウィーン楽友協会大ホール)

ブラームス作曲 ハイドンの主題による変奏曲作品 56a

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1949 年 3 月 30 日、4 月 2 日録音 ウィーン楽友協会大ホール)

頒布資料代：1,600 円（送料込み）

CD 申込方法

申込要領：

1. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
2. 申し込み期限は **2017 年 12 月 29 日（金）** です。
3. SWF171 はフランス協会およびフルトヴェングラー・センターの共同制作で、センター会員であればどなたでもお申し込みいただけます。
4. SWF171 は締切り後も在庫がある限りはご注文戴けますが、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
5. WFFC1704-HYM は原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は戴けますが、追加プレス・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
6. これらの CD はセンター会員自身が所有される事を条件に各々3セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

発送： SWF171 はすでに入荷済みですので、お申し込みいただき次第順次発送いたします。

WFFC1704-HYM は 2018 年 1 月下旬を予定しています。

お問い合わせの際は ①振込年月日、 ②振込金額をお知らせ下さい

第 80 回レクチャー・コンサート（講師：指揮者 徳岡 直樹 氏）

第80回レクチャー・コンサートは、ブザンソン指揮者コンクールでの入賞経験を持ち、現在台湾で指揮者としてご活躍中の徳岡直樹氏の初登場です。

現役の指揮者ならではの、また氏の旺盛な探求心による視点から、指揮者法の歴史的推移や、フルトヴェングラーの録音にまつわる考察を極めて興味深くお話いただきました。

特に「バイロイトの第九」の真贋論争については、普通では聞き逃しがちな編集痕からの考察は実に明快で、長年の論争に終止符を打つものと言っても過言ではないと思います。詳しくは、徳岡氏ご自身の寄稿を今回掲載しておりますのでそれをお読みいただくとともに、レクチャー・コンサートのビデオをご覧くださいとより理解が深まるものと思います。

なお、合わせてセンター理事中村匠一による詳細なレポートも掲載しましたので、そちらもご覧ください。

後半メインのフルトヴェングラー演奏による「トリスタンとイゾルデから愛の死」については、1951年録音をメロディア盤で、また1936年録音はポリドールのSPレコードを再生しました。



第 81 回レクチャー・コンサート（講師：舩木 篤也 氏）

今年最後の第81回レクチャー・コンサートは、第79回に引き続いて舩木篤也氏によるシューマンのシリーズの第2回目で、今回は交響曲第4番を取り上げました。

交響曲第4番は第1番「春」の次に初稿が書き上げられ、初演時のプログラムには第2番とされながらお蔵入りにされ、第2番、第3番「ライン」作曲の後に改訂されて、改めて第4番の名があたえられた曲です。フルトヴェングラーは改訂版による「第4番」を録音に遺しています。

初稿版に対するクララとブラームスとの評価の違いもあったという、二つの版の違い、作曲の経緯から、初稿版とベートーヴェンの交響曲第7番との関連性や、さらには、フルトヴェングラーを始めとする、歴代の指揮者によるスコアの修正など詳しくお話いただきながら、フルトヴェングラーの演奏についての考察を深めました。

交響曲第4番の全曲演奏は、まず2017年11月に発売されたばかりの新音源、Auditeから発売された1953年ルツェルン音楽祭でのライブ録音をハイレゾ再生し、続いてドイツ・グラモフォン録音の初期ドイツプレスの12インチ盤LPを再生しました。

頒布資料

恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のためにブルーレイ・ディスクとDVD-Rで頒布いたしますのでご利用ください。

メニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、鑑賞に使用した音源をブルーレイ・ディスクでは、96kHz/24ビットPCM無圧縮ハイレゾ音源として収録しました。DVDは48kHz、16ビットのリニアPCMです。

第80回

DVD-R (2枚組) 版

WFER1705-A/B ￥3,400

ブルーレイ版

WFER1705-BD ￥3,200

第81回

DVD-R (2枚組) 版

WFER1706-A/B ￥3,400

ブルーレイ版

WFER1706-BD ￥3,200

第80回レクチャー・コンサート
学ぶ指揮、真似ぶ指揮
棒振りフルトヴェングラーの指揮法教程
構成とお話 徳岡直樹



2017年10月9日(祝) 於：沖ミュージックサロン
制作・著作 フルトヴェングラー・センター ㊄

第81回レクチャー・コンサート
フルトヴェングラーのシューマン その2
交響曲第4番ニ短調 作品120
構成とお話 船木篤也



2017年11月25日(土) 於：沖ミュージックサロン
制作・著作 フルトヴェングラー・センター ㊄

バイロイト第九 EMI とセンター盤

Naoki Tokuoka・2017年10月18日(水)

歴史的な背景は省略。

フルトヴェングラー・センターの発掘によって初登場となった1951年7月29日のバイロイト実況の第九、そのセンター盤のCD登場後、それまで親しまれていたEMI盤と比較し、そのどちらが編集盤で、どちらがコンサートの実況なのかが論争となった。

EMI盤は発売後半世紀近くが経っており、フルトヴェングラーの代表的名演として世界中で聴き継がれていたが、センター盤の登場によりEMI盤がゲネプロをはじめとする練習の際の録音を使って、レグによって編集されたものである可能性が指摘され始めた。しかし演奏の感銘度を主な理由に「センター盤はリハーサル、もしくはコンサート前の通し稽古の録音であり、EMI盤こそがコンサート本番のレコード化である」と、少々極端で強引な定義付けまでなされた。

しかし冷静に聞いてみると、まずEMI盤のオーケストラの技術的問題がある。幾つかの管楽器のピッチ、音程の不安定さが顕著で、それらの問題がセンター盤では一応解決されていること。その他コーラスの立ちおくれなど「練習を重ねて上達する」のが普通ならば、センター盤の演奏の後にEMI盤の演奏が続くことは、現実的に考えられない。そして聴衆を前にした緊張感と、音の立ち上がりの鋭さ、演奏全体に一貫するピシッとした統一感は、明らかにセンター盤の方が優れている。

さらに両者に共通する部分と、異なる部分があるという点。これは聴衆ノイズによっても明らかであり、以下EMI盤の編集痕について指摘する。

【前提】

EMI盤の編集痕はやはり「わかりにくい」微妙なもの。これまで具体的な指摘がなかったのは仕方がない。そしてLPでは聞き取るのは不可能。それくらい絶妙な編集であり、CD、それも初期盤CDを使った方がわかりやすい。オーディオも高級機器よりも、システムコンポ…とまでは言わないが、廉価なシステムを使った方がわかりやすい。「音楽的に聞く」という目的ではないので。

そして留意しなければならないのは、両盤に共通する「同じ演奏」が、それぞれで違った聞こえ方、響き方をする部分もあること。収録マイク、保存、マスタリングが違うので、このようなことも起こりうる。思い込みや誤認は避けねばならない。

【前段階】

まず「足音つき」のCDを準備していただきたい。今回はTOCE-6510を使用した。この「足音」もどのような編集を経て制作されたものかよくわからず、疑問の多いものであるが、拍手が収まった後にフルトヴェングラーと、もう一人別人（短く返事をしている）が約8秒間にわたって会話をする。その後舞台が静まり、さらにその後、人為的な無音状態になる。そして演奏が始まると同時にテープが変わる。

これは編集されたことが明らかな箇所であり、聞き取りも比較的容易。しかしこの接続に気付くくらいでなければ、演奏本編の「接続痕」の発見は難しい。

【具体例】

第三楽章、83小節 4/4拍子。（CDH 7-69801で9'15"～） EMI盤の中でも特に技術的問題の耳につく箇所。ホルンの音程（低い）とクラリネット（高い）が気になる。センター盤では多少聞こえ方が違うが、同じ聴衆ノイズがあり、両盤とも同じ演奏。

しかしこの後99小節、12/8拍子（CDH 7-69801で10'53"～）からは別演奏になる。明らかに聴衆ノイズが異なり、テンポも違う。つまりこの「83小節～フレーズ」と「93小節、12/8拍子フレーズ」の中間の、どちらかに編集があるはず、ということになる。

ここでEMI盤を聴いていただきたい。この99小節の一拍前、三つの弦楽器のフォルテ（強音）のピチカートから、明らかにそれまでと音場感が異なり、急に広がりが出、音がやや甘くなる。（CDH 7-69801で10'50"～）絶妙な編集であり、LPでは判別しがたい。しかも「音楽を聴くのではなく、音の響きやバランスを聴く」という、非音楽的な聞き方をしなければならない。

そしてこの編集が行われた理由としては、センター盤はややソリッドで、クールなペースの演奏だが、EMI盤はよりゆったりとした幻想的な雰囲気がある。この辺りがレグの編集意図ではないだろうか。

第四楽章、vor Gott!の引き延しの「後（あと）」。一般にはこの引き延し（フェルマータ）の最後の音量アップが話題になるが、これは疑義はあるものの真偽不明。それよりも、その後、打楽器とファゴットでマーチ（行進曲）が始まる直前にテープが変わる。これもEMI盤ではフェルマータの余韻が消えた後に「人為的な無音」があり、次のフレーズが始まる直前にテープノイズ（ホワイトノイズ）が変わる。（CDH 7-69801で10'49"と"10'50"の境目）

【現段階の結論】

繰り返しになるが、EMI盤の編集は絶妙であり、これまで具体的な編集痕の指摘がなかったのも仕方がない。一つの可能性としては両盤の聴衆ノイズを分類、そして「共通する部分」と「異なる部分」の仕分けをして後、「この箇所には編集があるはずだ」と見当をつけた上で聞いてみなければ分からないかもしれない。

センター盤にも微妙なテープの接続はあるが、休止符の部分のみで、演奏中の編集は見つからなかった。肝心なのはセンター盤が演奏の一貫性があること、そしてこれまで「皆無」とされていたEMI盤には、実際にはこうした編集が確かに存在する、という点。拍手も様々なバージョンがあり、今やどれが正しいのか不明。

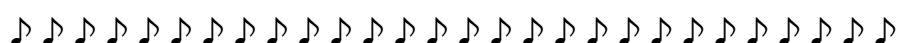
しかし演奏の整い方、緊張感の有無と音楽的感動は別であり、EMI盤には確かに例を見ない特別な感動がある。これに似た「聴衆あり・なし」の差は、フルトヴェングラーで言えば1948年10月のバッハ：管弦楽組曲第三番、ブラームス第四、1949年3月のブルックナー第8、トスカニーニの「椿姫」、ワルター/ベルリン・フィルの1950年9月25日のモーツァルト40番、ブラームスの2番などの例がある。

作曲家、佐藤眞の指摘する「バイロイトの第九」に「フルトヴェングラーの疲労」を感じるのは、リハーサルゆえの自在さ、悪く言えば聴衆不在ゆえの緊張感の欠如。EMI盤の音楽的感動は明らかだが、戦後再開されたバイロイト音楽祭開幕の「第九」のライブとしては、雰囲気的にラフすぎると思われる。

このほかゲネプロとコンサートの収録音質の違い、同年バイロイトでのカラヤン指揮の「ワルキューレ」第三幕との差についても考察が可能。

ただし「コンサート前に通し稽古が行われ、センター盤はこのゲネプロの録音である」という指摘には、反論できる素材を持たないので、ここではあえて「センター盤が100%コンサートの演奏である」とは言わないことにする。しかし演奏順序や上記の編集痕から、時間的に①EMI盤の大部分、②そしてセンター盤であるのは間違いありません。

あと複数のポイントもあるが、現段階でとりあえず「EMI盤の編集痕」の具体例を指摘した。皆さんそれぞれで検証をお願いしたく、ご指摘をお待ちしています。



第 80 回レクチャー・コンサートの感想

(理事・中村匠一)

10月8日の日曜日、フルトヴェングラー・センターの第80回レクチャー・コンサートに参加して来たので、その感想を書こうと思います。このレクチャー・コンサートは毎回様々な講師の方が、色々な視点からフルトヴェングラーとその演奏、そして彼の哲学、ひいては人生について語って下さる事が最大の楽しみなのですが、今回の講師である、台湾で活躍中の指揮者、徳岡直樹さんのお話も、旺盛な探求心と、フルトヴェングラーへの思い入れを強烈に感じた、熱のこもったものでした。

事前に多くのトピックスを準備され、その中から徳岡さんが最も重点を置かれていた6点を中心にお話をされたのですが、私の感想もその論点について一つ一つ触れる形で書いていきたいと思っています。

1. 指揮の技法

講座のつかみとして、徳岡さんは、ベートーヴェン以来の数々の作曲家であり指揮者でもあった偉人たちのエピソードを語られ、そしてハンス・リヒター以降のドイツのスタイルの指揮について語っていただきました。

この中で、私が非常に思い出に残ったのは、徳岡さんの師の一人である、ネーメ・ヤルヴィが「往年のドイツの指揮者の動き（映像）を見ることは非常に重要な事だ」と語ったという事でしょうか。彼は特にエーリヒ・クライバーを絶賛していたという事ですが、欧州の今を生きる演奏家や指揮者にとっても、往年の指揮者のバトン・テクニックは「過去の遺物」等では全くない、そこから学ぶことは沢山あるのだ。勿論、フルトヴェングラー然り。という事実に深い感慨を覚えました。

フルトヴェングラーの指揮のメソッドは知られているようで知られていない。カラヤンやバーンスタイン、チェリビダッケのような指揮のマスタークラスも持ったことはないし、様々な逸話はその姿を余計にわかりにくくしている、という鋭い指摘を徳岡さんはされていました。ただ、これも北欧の名指揮者、ヨルマ・パヌラが指摘していたように、フルトヴェングラーほど身体に一本芯の通ったような安定を保って指揮していた人もいなかったし、エリーザベト夫人が「彼は鏡の前でも練習をしていた」と語っていたように、その指揮は興奮や激情に突き動

かされたものではなく、何か明確な意図があったのだろうことも徳岡さんのお話からは伝わってきました。そう、フルトヴェングラー自身が「精密さとは私の『不明瞭な』指揮から生まれた自然の結果なのである。」と語っているように。

2. アルトウール・ニキシュ

そしてそのフルトヴェングラー自身に多大なる影響を与えた指揮者として、徳岡さんはベルリン・フィルの前任の常任指揮者であり、「魔術師」とも称されたニキシュについて語られました。

フルトヴェングラーがそうであったように、ニキシュも様々な伝説に彩られた指揮者でありました。Youtube 等に遺された映像からは、同じくニキシュに傾倒していた大指揮者、ポールの「最小の動作で最大の効果を生み出す」と言ったように、長い指揮棒で抑制されたモーションを見せる彼の指揮からは、フルトヴェングラーの指揮姿とは結びつかないものがあります。

ですが、このニキシュの指揮については他ならぬフルトヴェングラーが「あのありふれた拍子の取り方から何故どのオーケストラも普段と見違えるほどのひびきを発するようになるのか」と発言し、ニキシュ本人も「私は技術上の目標はなく、自分の感情を楽員にどう伝えるかを知らず知らずの内にやっている」と発言したという事です。

徳岡さんはここでニキシュとフルトヴェングラーの演奏の対比として、両者による「魔弾の射手」の SP 盤時代の録音をかけられたのですが、二つの演奏は全く違う。ですが、収録時間や録音のレンジと言った物理的制約を超えて、「指揮者の伸びやかな動きが伸びやかな音楽を引き出す」愉悦感がどちらの演奏にも感じられるのです。

最後にフルトヴェングラーの言葉を借りるなら、「ニキシュの指揮ぶりは長らくポーズの模範とされていたが、私はニキシュこそあらゆる『ポーズ』とは無縁の人だったと断言できる。彼はどこまでも音そのもの、音の形成と形象化に没頭していた。」という事になります。

その音そのものに没頭し、テンポと豊かな響きを結びつける という「目標」を持っていたことが、ニキシュとまるで異なるバトン・テクニックを持っていたフルトヴェングラーにおいても、躍動するリズムと、豊穡な響きを兼ね備えた音楽を作ることが出来た転機でもあったのかもしれない、そんな思いが聞いている私の胸にも去来しました。

3. 19世紀末のオーケストラ演奏とそのスタイル

前述のニキシユもそうであったのですが、フルトヴェングラーが小青年期を生きた19世紀末の音楽を、徳岡さんは「典雅であり、決して怒号しない」という表現で語られていました。

私の中でそれを最も感じたのが、トスカニーニ指揮によるモーツァルト、39番のメヌエットの録音です。ラッパ吹込み時代の演奏は、適度な間を置き、優雅にさえ聞こえた彼のフレージングが、後年のNBC響との演奏ではせつづくように前に早くなる。徳岡さんもそうでしたし、この日同席されていた音楽評論家の山崎浩太郎さんも指摘しておられた点なのですが、それは彼の聴力の衰えによるものが大きいのでは、という意見に私も同意します。

先日も王子ホールでのビオンディのコンサートで体験したことなのですが、演奏家にとっては、ホールにおいて自分が出した音が響きとして返ってこない環境 というのは、非常にやりづらなものらしい。そして、まだ王子の響きを掴み切れてなかったような前半、ビオンディの演奏はかなり前のめりになっていた感がありました。その事を考えても、響きとそれを奏者がどう受け止めるかは、音楽のテンポにも大きな影響を与えるものなのだなと改めて実感しましたね。

19世紀末的な演奏が日本の指揮者に影響を与えた例として、かつて日本でも山田耕筰が遺した「ベートーヴェン第五交響曲」など、ニキシユの演奏を彷彿とさせるものもありますし、「指揮法教程」を記された齋藤秀雄先生もフルトヴェングラーリズム感が「やや重い」という感想を持ったそうです。同時代の近衛秀麿先生がフルトヴェングラーは同時代の音楽家の影響を受けない、音楽と共にそこに立っている指揮者だったと評されているのと対照的でもあります。

そういう過去の偉人の様々なエピソードを紹介されて後、徳岡さんはフロイデフィルの故・宇宿允人先生の事について話して下さいましたが、まず、重い一拍をおいて、楽員の精神を集中させ、それから拍を刻んでいく宇宿先生のアプローチに、フルトヴェングラーに対する大きな敬意を感じられたそうです。

往時のヨーロッパの演奏から、日本の指導者の方々の思い出を挟んで、最後に流されたフルトヴェングラーの1930年代の「ハンガリー舞曲」の分厚い中低域を軸にした高揚感と推進力に満ちた演奏を聴き終わり、私たちはそこに20世紀のクラシックシーンから吹いてくる勢いに満ちた熱風を浴びたような気がしたのでした。

4. バイロイトの第九 EMI 盤とセンター盤（プログラムでは6 番目）

「フルトヴェングラーを代表する名盤と言えど？」とクラシックファンに問えば、かなりの高確率でこの盤の名前が挙がるでしょう。「レコード芸術」の名曲名盤ランキングにおいても、この第九とフィッシャー・ディースカウとの共演である「さすらう若人の歌」は長年不動のトップを守ってきた録音でもあります。

そんな彼のベートーヴェン演奏の代名詞的な一枚に、大きな衝撃が走ったのが2007年、バイエルン放送による同演奏会の記録と言われるテープの発見でした。これにはフルトヴェングラー・センター現代表の中村さんの尽力もあり、センターとオルフェオから同テープによるCDがリリースされた時は、私的にも非常に気持ちが高揚したことを覚えています。

それと同時に、EMIの「バイロイト」とバイエルン放送による音源のどちらが本当のライブなのか？という真贋論争も盛んになりました。徳岡さんの分析はその問題に対して、指揮者としての技術的なスタンスと、フルトヴェングラー研究者としての熱意をもって非常に深く掘り下げたものであったと思います。

結論から言うと、徳岡さんの分析によると「バイエルン放送のテープによる音源の方が『時系列的には後』だと、私は確信しています。」との事でした。理由は私の記憶が確かならば以下の通りです。

(1) 3楽章のホルンの音程がEMI盤はかなり低く、またクラリネットの音程が高すぎるところがある。また、一部ホルンのパートに遅れが目立つ。

(2) 4楽章のコーラスがEMI盤では全体的に遅れているが、センター盤ではほぼジャストタイミングで決まっている。指揮者は本番に向けてリハーサルを通して完成度を高めていくもの、練習を通じた成果がここまでバラけた演奏になることは技術的観点から見てあり得ない。

(3) EMI盤は決定的な編集痕がある。例えば「足音入り」の音源における足音の不自然な高さ、会話が交わされた後の音の継ぎ目、さらに四重唱「und der Cherub steht vor Gott!（そして智の天使は神の御前に立つ!）」のフェルマータの後、余韻が消え、音が始まる前に別のヒスノイズが重なる。

徳岡さんがバイロイトの第九に疑問を強くしたのは、作曲家の佐藤眞さんの技術的な側面から見た同演奏への批判がキッカケであったようです。曰く「正確さが欠如し、音も汚い、木管のピッチも合っていない。端的に言えば『拙演』だ」というものでした。そして、徳岡さん自

身戦時中のメロディア盤など、「否応なく生々しい」フルトヴェングラーの記録の数々を聴いて、その探究の末にたどり着かれた答えであったようです。

では、何故、EMIは、いや、ウォルター・レグはフルトヴェングラーの演奏を編集して「バイロイトの第九」としてリリースしたのか？諸説ありますが、その真相は分かりません。ですが、レコードというものを「演奏者の記録」としてだけでなく、プロデューサーや録音技師なども含めた「作品」として捉えるならば、「バイロイトの第九」という一枚はバイエルン放送のテープが出た事により、無価値なものに堕ちたのではなく、新たなドラマの1ページを作ったのだと私は思っています。

かつて吉田秀和先生が「世界の指揮者」で語られた「その歓喜の幻がだんだんと身近に迫り、真実の響きとなってきこえてくるかのように、しだいに大きく、そうして速くなるというふう」に扱われている。あれをきいた時の感銘というものは、私には忘れられない。『第九』のあのふしをきいて、胸がいっぱいになったのは、私はあとにもさきにも、あれだけである。」という感動体験を、私も、そして間違いなくこのレコードを10歳の時に手にされた徳岡さんもされたに違いないと私は思います。感動を覚えなかったものを人はこれ程までに研究することはない。その感動の原体験があるからこそこのここまでの掘り下げがあったのだと、改めて深い感慨を抱きました。

5. フルトヴェングラーの指揮技術と演奏（プログラムでは、4番目・5番目）

その「バイロイト」に関する考察を経て、徳岡さんが特段の思い出がある「トリスタンとイゾルデ」から「前奏曲と愛の死」を徳岡さん自身のピアノ演奏による解説も交えながら、6種類ほど聴きました。彼の同曲による演奏は、正にワーグナーの魔力に憑かれながら、強烈な陶酔感と情熱を持って、周囲を巻き込んでいく呪縛力に満ちています。特に最初に聴かせて頂いた1942年のメロディア盤LPの演奏はその最も典型的な例と言えるかもしれません。

が、私自身はこれも吉田先生が彼の演奏を聴いた時と最も近い時期のライブ、1954年のアウディーテ盤の演奏に惹かれました。そこに収められた透明な響きには、「トリスタン和音」に象徴される二人の成就されない思いが、現世を離れて成就したような、昇華した哀しみともいえる感情が存在した、そんな気がするからです。そして、その響きこそフルトヴェングラーその人がニキシュの演奏を聴いたその日から追いつけてきたものだったのではないかと。

フルトヴェングラーを最も尊敬する巨匠の一人、セルジュ・チェリビダッケの語録にこのようなものがあります。「同時的に生ずる音響現象の総体を、水平の流れやテンポに置き換える、そのやり方を理解していた唯一の指揮者は、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーである。」そして「フルトヴェングラー以外の指揮者からわたしが学んだものはない」と結んでいます。この発言自体が、ニキシユに対するフルトヴェングラーの言葉と酷似しているように私には思えます。

ニキシユ、フルトヴェングラー、チェリビダッケ、その各々の演奏には録音で一聴する限り、何かの関連性を見出す事は難しい。しかし、それぞれが自ら理想とする響きを心に抱き、それを実現するためにテンポを設定していた、という事であるならば、数々の放送音源を含むフルトヴェングラーの作り出した「響き」をより良好な状態で収めた録音がこれからもリリースされることを期待したいと思います。

徳岡さんのレクチャーによれば、1954年11月30日の命日まで、聴覚の衰えにも関わらず、作曲に、またアメリカ公演に向けての情熱を燃やし続けたフルトヴェングラー、その生涯はまだ謎を多く残しています。ですが、その謎があり続けるからこそ、センターやFacebookの「フルトヴェングラーを聴こう」コミュニティのように、フルトヴェングラーについて語る場も絶えず、その繋がりから、またこの日のような出会いが生まれる。その事に深い感謝を捧げつつ、大分冗長になってしまった私の日記のペンを置く事に致しましょう。

徳岡さん、有難うございました。またお会いできる日を楽しみにしています。

#####

レターNo. 20

ハンブルクにて 1928年4月25日(注1)

拝啓 親愛なるブランド博士(注2)へ

5月3日(注3)の演奏会の後、晚餐への貴殿の親愛なるご招待に感謝申し上げます。
大変残念ながら私はそのご招待に応えることが出来ません。演奏会の後、私は車でケルン(注4)に移動せねばならないのです。私は晚餐を貴殿と共に過ごせないことを心から残念に思います。

敬具

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

Sehr geehrter Herr Dr. Brandt,
für ihre so liebenswürdige Einladung
nach dem Konzert am 3. Mai bei Ihnen den
Abend zu verbringen danke ich Ihnen
herzlichst. Leider kann ich ihr aber nicht
folge leisten, da ich denselben Abend sogleich
nach dem Konzert per Auto nach Köln
fahren muß, wo ich (?)
Ich bedauere aufrichtig, auf diese Weise
nicht die Möglichkeit zu haben, mit Ihnen
den Abend zu verbringen
und begrüße Sie mit Ihnen den
besten Empfehlungen
Ihr ergebener
Wilhelm Furtwängler

Sehr geehrter Herr Dr. Brandt,
Für ihre so liebenswürdige Einladung
nach dem Konzert am 3. Mai bei Ihnen den
Abend zu verbringen danke ich Ihnen
herzlichst. Leider kann ich ihr aber nicht
Folge leisten, da ich denselben Abend sogleich
nach dem Konzert per Auto nach Köln
fahren muß, wo ich (?)
Ich bedauere aufrichtig, auf diese Weise
nicht die Möglichkeit zu haben, mit Ihnen
den Abend zu verbringen
und begrüße Sie mit Ihnen den
besten Empfehlungen
Ihr ergebener
Wilhelm Furtwängler

(注1) この書状の日付は誤りの可能性が高い。フルトヴェングラーは4月22日よりベルリン・フィルと楽旅に出て、デンマーク・ドイツ・フランス・スイスを回り5月20日にドイツで終る旅だったが、4月25日にはコペンハーゲンで演奏会を開いている。ハンブルクでの演奏会は4月27日である。1~2日勘違いをしているのではないだろうか。

(注2) このブランド博士について調べたが、分からなかった。

(注3) 5月3日の演奏会はデュッセルドルフで行われた。

(注4) 確かに5月4日にケルンで演奏会が行われている。

#####

第 82 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時： 2018年2月3日(土)

開演 午後1時30分開演 終了 午後5時ころ

講師 広瀬 大介 博士

第 83 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時： 2018年3月3日(土)

開演 午後1時30分開演 終了 午後5時ころ

講師 広瀬 大介 博士

第 82 回と第 83 回は広瀬大介博士にお話をいただきます。テーマは、モーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」を恒例により第 1 幕と第 2 幕の 2 回に分けてお話しいたします。広瀬博士は 2018 年 4 月から 1 年間、ドイツのミュンヘンで研究活動に専念されますので、レクチャー・コンサートへのご登場はしばらくお休みとなります。

○参加費：

第 82/83 回とも センター会員 1 0 0 0 円、(非会員 2 5 0 0 円)

○会 場：沖ミュージック・サロン

○お問い合わせ、予約：

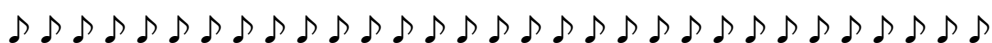
電話または E メールで下記まで。満席の場合はご入場いただけませんので、できるだけ予約ください。キャンセルは前日までにお願いいたします。

TEL： 080-660-33-444

(電話でのお問い合わせなどは夜 8 時～ 1 0 時の間にお願いいたします)

E メール：info@furt-centre.com

終了後、引き続き講師を囲んで懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は 2 0 0 0 円程度で、当日会場でもお申し込みをお受けいたします。フルトヴェングラー・ファン同士で軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょうか？



会員継続手続きのご案内

～ 手続き期限 2017年12月29日(金)迄です ～

12月31日を以てフルトヴェングラー・センターの会員期間が満了になります。次年度も引き続きセンターをご支援いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

下表を参照いただき、同封の郵便振込票にて12月29日(金)までにご送金いただきますようお願い申し上げます。CDなど頒布資料をご購入いただく場合は、下表の「年会費額」に「頒布資料の金額」を加えてください。

例：センター会費 3,000円 + WFFC1705-HYM 1,600円 + SWF171 2,300円
 + WFER1705-BD 3,200円 + WFER1706-BD 3,200円 = 合計 13,300円

会費	①フルトヴェングラー・センター年会費	3,000円
頒布資料	WFFC1705-HYM (1CD) ブラムス 交響曲第1番 (1947年 EMI 録音) ハイドンの主題による変奏曲 (1950年)	@1,600円
頒布資料	SWF171 (1CD) 1950年 スtockホルムのフルトヴェングラー ハイドン 交響曲第94番『驚愕』 シベリウス 交響詩《エン・サガ》 R.シュトラウス 交響詩《ドン・ファン》	@2,300円
頒布資料	第80回レクチャー・コンサート DVD-R (2枚組)版 WFER-1705-A/B	@3,400円
	ブルーレイ版 WFER-1705-BD	@3,200円
頒布資料	第81回レクチャー・コンサート DVD-R (2枚組)版 WFER-1706-A/B	@3,400円
	ブルーレイ版 WFER-1706-BD	@3,200円

《 お 願 い ・ お 断 り 》

◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。

◎郵便振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！

センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。

◎海外協会製作のCDにつきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいております、フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないような損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦下さい。

◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。

◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とのリハーサル風景（コンサートマスターはアルノルト・ロゼ）

フルトヴェングラー・センター 会報第50号 発行日 2017年11月

発行人 フルトヴェングラー・センター®

〒223-0052 横浜市港北区綱島東2-14-16

名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士 名誉顧問：ヴァルター・バリリ

名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティーレマン アドヴァイザー：ヘニング・スミット（オルセン）

顧問：松山浩介

会長：理事 中村政行 理事：鈴木芳雄、呼川秀邦、市川悠一、大橋陽一郎、薬師寺純平、中村匠一（音響担当） 監事：鹿内浩胤

チーフ・リサーチャー：清水宏 テクニカル・アドヴァイザー：清水公典

電話（お問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いします）080-660-33-444

郵便振込口座 00240-9-111630 E-mail: info@furt-centre.com URL: furt-centre.com